こーひーぶれいく

アラフォーからの米国留学体験記

淵上　剛志
Fuchigami Takeshi

2017 年，長崎大学薬学部所属時に，40 歳目前にして 1 年間の米国留学の機会を得た。コネが全くなかったが，人脈豊富な先生方のご助力により，分子イメージングの先駆者である Stanford 大学の Gambhir 教授のもとで学ぶことができた。彼の研究への情熱と教育方針には強い影響を受け，1 年間の研究生活は非常に充実していた。今回はその体験について，アメリカでの日常生活を中心に記してみたい。

留学前後から多くの人に助けられた（迷惑をかけた？）。まず出国直前に家族のビザ申請を忘れており，大急ぎで在日大使館のある大阪まで向かい何とか間に合わせた。また，住居探しでは Stanford 日本人会に所属されていた先生に家具付きの住居を譲ってもらい，契約手続きも手伝ってもらった。車の運転免許では何度も Stanford の仲間に付き添ってもらいようやく取得できた。子供たちは現地の小学校に通うため追加で 4 種類の予防接種を受けた。ツベルクリン検査も受けたが，アメリカでは BCG 接種が一般的でないため，息子の陽性反応に診療所に不穏な空気が流れた。後日，レントゲン検査で結核陰性が確認され，無事に事なきを得た。

研究室や家族の学校活動が始まると，英語が全く通用せず会話が難航した。発音が独特で聞き取りにくいと指摘され戸惑った。英語が上達した息子に通訳してもらうこともあった。そんな中，妻は近所の ESL（English as a Second Language）プログラムに通い始め，私もその影響で，週何回かラボの研究を早めに切り上げて夜間クラスに通うようになった。強面のメキシコや中米出身の生徒たちに囲まれ，最初は不安もあったが，彼らの親切さに助けられ，次第に英語力も向上して，ラボのメンバーとも雑談を楽しめるようになった。

アメリカ料理は多彩で美味しいものが多かったが，私のナンバー1 は In-N-Out バーガーだった。メニューはハンバーガー，ポテト，ドリンクだけで，日本で言えば替え玉，替え肉，酒のみの元祖長浜ラーメンのようなシンプルさだった。安くて美味しく，頻繁に通った。また，あまり馴染みのないメキシコ料理もすっかり気に入り，特に大学内カフェでのブリトーボウルは絶品だった。これまで苦手だったアボカドだが，メキシコ料理として食べることで逆に好きな食材となった。

休日には，ささやかながら様々な場所に出かけた。特にお気に入りは近場のサンタクルーズで，古風な遊園地や賑わう砂浜を歩くだけで爽快な気分になり，趣味の釣りも楽しめた。橋桁の下で眠るアザラシや，時折泳ぐラッコの姿にも癒された。唯一の遠出となったアリゾナ州への旅行は，驚くほど印象深いものだった。フェニックス空港からセドナへ向かう途中，砂漠のサボテン風景から赤い岩の美しい山岳風景へと変わる景色はまさに絶景だった。更に，セドナからメテオクレーターへ向かうルート 66 のドライブでは，広大な地平線の美しさを存分に堪能できた。しかし，この旅行には続きがあり，日本での仕事のための一時帰国日を間違えていたことに気づいた。帰宅後 30 分で荷造りを終え，サンフランシスコ空港へ急行する羽目になった。

また，車にまつわる危険な体験もあった。渡米直後，右折で左車線に入ってしまい，対向車と衝突しそうになったことや，帰国直前に他州ナンバーのレンタカーで夜中に大学に向かっていると，警察に止められ拳銃を構えられたこと等，命の危険を感じた瞬間もあった。

帰国後，Gambhir 教授の訃報を聞き，大変驚いた。彼の教えを受けた多くの研究者が今も活躍しており，その遺志は生き続けている。年齢を重ねる中で，彼の熱意や若手研究者たちのエネルギーに影響を受け，私も日々新たな気持ちで頑張ろうと感じている。

（金沢大学医薬保健研究域）